

## 古代史教養講座 創立1995

松戸市常盤平 2-18-9

〒270-2261 電話 (047)384-5728 <http://www.geocities.jp/kdil1995>

振込銀行口座 三井住友銀行 飯田橋支店 普通預金 6355550 口座名・古代史教養講座

**本ニュース305号は7～8月号です。****当会ゼミは7、8月も休講とします****<ワクチン接種情報>**

全国1741の市町村(東京23特別区を含む)で、高齢者向けワクチン接種が始まりました。皆さんも、所属市町村で予約(又は予約中)したと思います。高齢者向けワクチン接種が概ね終了するのは8月と思われます。そこで、下記の理由の通り、**7月と8月も休講**とします。

## 記

- 1、ワクチンの効果は、2回目接種後1週間とすると、8月下旬接種会員も、免疫効果が出るのは9月になる事。
- 2、今夏も昨年並みの猛暑予報が出ており、又、長期自粛で体力低下の会員もおり、夏は体力回復にあてる。以上の理由で、7、8月を休講とします。
- ◎9月ゼミ再開は、コロナの国内状況が次の項目をクリアすることを条件として開催を考えたいと思います。
  - ① 大多数の会員(現会員数100名)が8月下旬頃までにワクチン接種を完了できる事。
  - ② この間65才未満の国民のワクチン接種が進行して、感染者が減少し、集団免疫獲得の展望が見える事。
  - ③ 新型変異株が出現しても、接種済みワクチンが90%以上有効である事。
  - ④ 万が一感染しても、重症化しない事が科学的に証明されている事。以上。

**<ワクチン効果>**

- 1、変異型に対する横浜市立大と英国保健局の見解  
ワクチン接種1回目のワクチン効果は、英国型変異株に対しては20%の効果だった(横浜市立大)。インド型に対しては33%の効果だった(英国保健局)。  
2回目接種後7日間経過以降の効果は、英国型変異株に対しては94%の効果だった(横浜市立大)。インド型に対しては88%の効果だった(英国保健局)。
- 2、m=メッセンジャーRNA(ファイザー社製ワクチン)  
これまで日本で使用されていたワクチン(不活化ワクチン、組換えタンパクワクチン、ペプチドワクチン)は、

ウイルスの一部のタンパク質を人体に投与し、それに対して免疫が出来る仕組みである。一方、mRNA ワクチンは、ウイルスのタンパク質をつくる基になる情報の一部を注射する。人の身体の中で、この情報を基にウイルスのタンパク質の一部が作られ、それに対する抗体等ができることで、ウイルスに対する免疫ができる。情報を注射してから免疫ができる迄に一定の時間がかかる。1回目接種で10日～14日間、2回目接種で7日間位かかる(厚労省)。しかし、ワクチンは2回接種しても完全に感染を抑えるわけではないので油断は禁物(北里大)。

## 3、集団免疫

免疫は、ワクチン接種者と既存感染者が保有する。この免疫保有者の対全人口比率が、ある数値を超えると感染が広がり難くなる、この状態を集団免疫と言う。米政府の新型コロナウイルス対策チームのファウチ博士(米国立アレルギー感染症研究所長)は、この比率を「70～90%の間」と述べた(NYタイムズ)。了。

**記紀に隠された史実を探る・第3回**

聖徳太子について考える②：飯田眞理会員記【はじめに】今回は、日本書紀の記述を批判的に検証して、聖徳太子の実像を探ることにする。

## (1) 日本書紀における聖徳太子関係記事

## ① 到底史実とは思われない説話など

- (i) 生まれた時から話すことができ、壮年のときは1度に10人の訴えを聞いて、未来のことも知っていた。
- (ii) 片岡で飢人へ飲食物を与えたが、翌日その人は死んでしまっ、死体は消えていた。聖徳太子は「聖者が聖者を知る。それは真実」と語った。飢人も太子も聖人である。
- (iii) 守屋討伐のとき、四天王像を作って願ったので、勝つことができた。
- (iv) 聖徳太子が亡くなったときの人々の悲しみの記述
- (v) 高句麗に帰国していた太子の師である慧慈は、太子の死を知り「私は来年の二月五日に死ぬ」と語った。慧慈は約束した日に死んだ。時の人は「上宮太子だけ

が聖人なのではない。慧慈もまた聖人だ」と語った。

(vi) 十七条の憲法(注:推古朝のものではあり得ず、奈良時代に書かれたものと考えられる。)

### ②史実の可能性が高い仏教関係の記事

(i) 推古二年:天皇は、皇太子と大臣(馬子)に詔して仏教の興隆を図られた。

(ii) 推古十一年:秦造河勝が皇太子の持っていた仏像を受け取り、蜂岡寺を造った。

(iii) 推古十三年:天皇は皇太子・大臣などに召されて・銅と縫物の一丈六尺の仏像を各一楹造りはじめた。

(iv) 推古十四年:天皇は皇太子に請願して、勝鬘經を讀経させた。・皇太子は法華經を岡本宮で讀経した。

### ③仏教以外の政治関与記事

(i) 推古十年・十一年:新羅討伐の計画に関与した。

(ii) 推古十一年、冠位十二階の制定:(注:蘇我馬子の主導によるものと考えられる。)

(iii) 推古十五年:(天皇は詔して)皇太子と大臣と百僚を率いて、神祇を祀り捧んだ。

(iv) 推古二十八年:皇太子と嶋大臣(蘇我馬子)は合議して、天皇記と国記、臣連伴造などの本記を録した。

### (2)聖徳太子の実像について推理する

以上のように、聖徳太子を偉大な仏教の聖人とする逸話などが目立つ。それらは史実ではなく後世に創作されたことは間違いない。それらを除くと実像としては、仏教の興隆に尽力した太子級の皇子であっただけになる。では、なぜ聖徳太子信仰が生まれたのか。結論からいうと、その理由の一つは、遣隋使の失敗により政治生命を絶たれた悲劇の皇子であつたと推測する。

★隋書倭国伝には、開皇二十年(600年)の遣隋使について、次のように記す。「(倭国の)使者言う『王は天を以って兄と爲し、日を以って弟と爲す。天未だ明けざる時、出でて政を聴き、跣踏して座し、日出ずれば便ち理務を停め、云う、我弟に委ねんと。』高祖曰く『これ太いに義理無し』と。是に於て訓して之を改めしむ。』つまり、隋の高祖文帝(楊堅)から「馬鹿げたことなので、改めるべきだ」と説教されたのである。倭国の祭祀を蔑められて未開の夷国扱いされたあり、大変な屈辱である。そのため日本書紀はこの600年の遣隋使を記さなかったと推測できる。この遣隋使の派遣には聖徳太子が強く関与していたと考える。その根拠は「倭王、姓は阿每、字は多利思比孤、号は阿鞞羅彌、遣使を王宮に詣でさせる」との記載である。使いを派遣した主は「多利思比孤」つまり男王である。女帝の推古天や大臣の蘇我馬

子ではなく、聖徳太子が最も適切である。

★7年後607年に、二度目の遣隋使として小野妹子らを隋に派遣する。聖徳太子は前回の失敗を挽回しようとしたのであろう。隋書には「大業三年、其の王、多利思比孤、使を遣し朝貢す。使者曰う、『海西の菩薩天子、重ねて佛法を興すと聞く。・・來りて佛法を學ぶ』と。其の國書に曰く『日出ずる處の天子、書を日没する處の天子に致す。恙無きや云云』と。帝、之を覽て悦ばず。・・曰く『蠻夷の書無禮なる者有り。復た以て聞するなかれ』と。」隋も倭国も天子の国としたのであるが、中華の皇帝である煬帝にとっては無礼極まることである。聖徳太子は、隋との対等の関係を伝えた偉大な政治家であつたとする考え方が広くあるが、このような国書は当時としては極めて非常識で、外交政治家として失格である。聖徳太子にとっては致命的なことだったのである。翌608年、裴世清が小野妹子の帰国に伴って飛鳥に来る。煬帝は倭国からの国書に、当時緊張関係にあつた高句麗の影を感じたのではないだろうか、裴世清を派遣した目的は、倭国の無礼を咎めるだけではなく倭国の地理・政治・軍事などの情報を得るためだつたと推測できる。その根拠は隋書には倭国のことが、詳細に記されているからである。(その内容は省略)隋書には倭王が『我は夷人にして海隅に僻在し、禮義を聞かず。・・冀は大國惟新の化を聞かん』と裴世清に謝つたことが記されている。そして、裴世清が帰国のときに倭王に語つた言葉『即ち塗(みち)を戒めよ』とは、「高句麗に味方することを止めよ」ということと考えられる。

★ところが日本書紀においては、隋書とは全く異なつていて倭国と隋との関係が対等であるような記述である。日本書紀には、「自分は夷人で、礼儀を知らない。」などの自虐的なことはとても書けなかつたであろう。日本書紀では、この推古十六年608年から亡くなる推古三十年622年まで、国記・天皇記の編纂以外には聖徳太子は登場しない。推古二十年の堅塩媛の檜隈大陵への改葬という一大国家行事にも聖徳太子は参加していない。この二度におよぶ遣隋使の屈辱により、聖徳太子は完全に政治から離れて仏教一筋に生きることになつたと考える。以上 次回は「上宮王家の滅亡と怨霊」について述べる。

## 朝鮮出兵は秀吉の誇大妄想か

—清野敬三会員記—

### ◇はじめに◇

文禄・慶長の朝鮮出兵は、現地のみならず日本国内

にも非常な惨禍と疲弊を齎したことにより、秀吉に対する評判は、特に戦後になって頗る悪くなっています。出兵の動機として、秀吉が耄碌して誇大妄想に取りつかれたとか、膨張主義による身勝手な名誉欲・征服欲によるとか、国内の統一が終わり不要の兵力のはけ口を求めたとか、いろいろ云われています。

はたして秀吉の本当の動機は何だったのでしょうか。秀吉の認知症が原因だったのでしょうか。私は、イベリア勢力の世界侵略に対する秀吉の対抗心が基本にあったと考えていますが、当時の海外情勢や日本の置かれていた状況などから、見ていきたいと思えます。

#### ◇大航海時代の布教と領土拡張◇

15世紀末に「大航海時代」が始まりました。スペインとポルトガルは、1494年「トルデシリャス条約」により地球を二分し、世界領土拡張に乗り出しました。ポルトガルは東進してアフリカ大陸南端からインドに進み、ゴアに拠点进行、マラッカ海峡を占拠しました。スペインは、西進してブラジルを除く中南米を植民地とした後、フィリピンに到達しました。

彼らは他国を植民地化するに際し、まずキリスト教の宣教師を派遣し布教拠点を作り、住民を改宗させると軍隊を派遣し、その地を征服する方法をとりました。その征服活動は必ずしも平和的ではありません。多数の地元民を殺害し、或いは奴隷として拉致しています。ピサロによるインディオ虐殺は、悲惨であり衝撃的でもあります。新大陸発見の荣誉に輝くコロンブスでさえ5万人以上の先住民を虐殺したと云われています。しかも、殺人を神の御名において正当化して、良心の呵責は感じておりません。

#### ◇日本征服論と明征服への日本兵利用構想◇

日本への最初の接触は、1543年に種子島に漂着したポルトガルです。1549年には、ポルトガル系イエズス会のザビエルが鹿児島に上陸してキリスト教の布教を始めました。スペインはやや遅れ、1584年にフランシスコ会の宣教師が平戸に来日しています。

ポルトガル人やスペイン人は、日本に対しても、まずキリスト教を布教し、その上で征服しようとしていました。さらに日本を征服した後、明国を征服するのに日本の兵力を利用しようと考えていました。このことは、彼らのアジア征服に関する書簡が沢山残されており明らかです(高橋弘一郎『キリシタン時代の研究』岩波書店)。

例えば、イエズス会日本布教長を務めたカラブルは、1584年の国王宛の書簡に書いています。まず、シナ王国の年貢の多額さを挙げ、この国を征服すれば陛下は膨

大な財宝を獲得することができるとしています。シナの国民は逸楽にふけり柔弱で、非武装であるから征服事業は容易だと指摘しています。征服のためには「日本に駐在しているイエズス会のパードレ達が、容易に2~3000人の日本人キリスト教徒を送ることが出来るであろう。彼等は打ち続く戦争に従軍しているので、陸、海の戦闘に大変勇敢な兵隊であり、僅かな給料で嬉々として馳せ参じ、陛下に御奉公するであろう」と書いています。

イエズス会日本準管区長コエリョも、1585年フィリピン布教長宛に日本への軍隊の派遣を求めた書簡を書き送っています。「日本に早急に兵隊・弾薬・大砲と必要な食糧と金を搭載した3、4艘のフラガータ船を派遣していただきたい。キリスト教大名を支援し、服従しない敵に脅威を与えれば諸侯たちの改宗が進むだろう。日本六十六ヶ国凡てが改宗するに至れば、フェリペ国王は日本人のように好戦的で伶俐な兵隊を得て、一層容易にシナを征服することが出来るであろう」と述べています。

また、天正遣欧少年使節派遣を発案した巡察使ヴァリニャーノも同様に、日本の征服を、明征服の前段階として位置付けています。当時、キリシタン大名や武将たちは宣教師の指示に忠実とみなされ、日本兵の動員も容易であると思われていたようです。

#### ◇秀吉のバテレン追放令◇

秀吉は九州平定後の天正15年(1587)、バテレン(宣教師)追放令を発しました。これは、イベリア勢力の目的が日本征服にあることを見抜いたからです。キリシタン大名は宣教師の指示に従い、領内の神社仏閣を破壊し、家臣や領民に改宗を強制しました。長崎領主の大村純忠は、長崎を寄進して教会領にしてしまいました。また、イベリア商人が何万人もの日本人を奴隷にして海外へ売却するのに宣教師が手を貸していること、等々に秀吉は怒りをぶつけたわけです。

宣教師たちの布教活動が日本征服を目的としており、信徒たちの忠誠心や団結力が非常に強固であることを秀吉が危険視し、その危険性を除去するための措置であったと云えます。ところが、この追放令は徹底しませんでした。その後も宣教師たちは布教を続けています。それは、布教と貿易が密接に結び付いており、厳しく取り締まると貿易が成り立たなくなるからです。秀吉は、南蛮貿易を積極的に推奨しており、宣教師は貿易斡旋業者でもあったからです。

#### ◇秀吉、スペインとポルトガルを恫喝し服属を要求◇

秀吉は、朝鮮出兵を明征服の前段階と位置付けてい

ましたが、それだけでなく琉球・台湾から、さらにはスペインのフィリピン総督やインドのゴアのポルトガル副王にまで服属を要求しています。デマルカシオン(世界領土分割)を国是とするスペインとポルトガルのアジア支配の野望に対抗しようとしていたと云えます。

秀吉は、天正 19 年(1591)フィリピン総督宛の書簡で入貢と服属を強要し、従わなければ討伐するぞと脅しています。朝鮮征服を前提に「予は今や大明国を征服せんと欲す。フィリピンも、その地を取らんと欲す。服従すべき時なり。もし服従すること遅延せば、速やかに征伐を加うべし。後悔することなかれ。」フィリピン総督は、これに驚いて厳戒令を布き、スペイン国王に援軍派遣を要請しています。原住民蜂起の噂もあり、日本の攻撃をきっかけにスペインの植民地支配が崩れる危険すら感じたようです。

翌天文 20 年(1592)ポルトガル領インド副王には、バテレンによる布教禁止を通告し、大明国へ出兵し征服する旨通知しています。これは、明国を征服したら、その後はインドも攻め取るぞという意を込めています。

文禄の役の講和交渉の最中の文禄 2 年(1593)には、さらに激しい書簡をフィリピン総督宛に送っています。「予は高麗を獲得した。多数の武将がマニラ占領を予に求めているが、予は兵を派遣せず。ルソンは、シナと甚だ近く予が親指の下にあり。国王は遠方にあると云うとも、予が言を軽視すべからず。」

ポルトガルは 1580 年にスペイン国王の支配下に入り、フェリペ II 世が両国の国王を兼ねることになり、スペインが西欧の最強国になりました。その最強の国王に対して、強烈な対抗心と自負心を誇示したと云えます。

#### ◇秀吉の朝鮮出兵の動機◇

以上のような点からみて、朝鮮出兵の動機は、アジアに進出してきたヨーロッパ勢力に対する秀吉の怒りと対抗心だと思います。スペインが征服を目論んでいる明国を、自分が先んじて征服するぞという自負心です。但し、明国の征服は全国土の占領というよりは軍事的圧力をかけて、アジア海域の貿易の主導権を握ることにあったと私は考えます。秀吉は、貿易の利益を重視しており、明との講和交渉の際「勘合」を持ち出したのは、そのためだと云えましょう。

大国である明征服などは全く無謀の暴挙にみえるし、できるはずがなかったという見方もあります(池上裕子『織豊政権と江戸幕府』講談社)。しかし、当時、明朝は末期症状を呈して内部は弱体化していました。朝鮮出

兵の少し後になりますが、1644 年に北方の異民族女真の八旗兵 10 万余騎が北京に侵攻して、明朝はもろくも崩壊しています。異民族女真が清朝として中国の支配に成功したわけです。文禄・慶長の役の動員兵力が各 15 万延べ 30 万であることを考えると、明征服は全く不可能とは云えず、あながち秀吉の認知症による狂気のせいとは云えません。また 1583 年にフィリピン総督のロンキーリョが国王宛書簡で、僅か 8000 人のスペイン兵と 10 ないし 12 隻のガレオン船で簡単に明国を征服できると豪語しているのも当時の感覚でしょう。

秀吉は国内統一に飽き足らず、その征服欲を満たすため国境を越え、強欲な侵略戦争を仕掛けたと非難されることもあります。しかし、秀吉は国内征服を終えた後に、大陸侵攻を企図したのではなく、両者は並行的に進められています。当時、国内と海外という境界は、近代国家のような国境線は想定されていません。秀吉による支配地域の拡大は、周辺勢力を順次併呑していく過程であり、国内の大名も外国の王も、「化外」として同質の存在とみなしていました。これは、西欧列強が海外の領土拡張に向かったのも同じ論理です。明国も冊封体制の盟主として周辺国の服属を目指しています。領土拡張は、当時は英雄的行為でもありました。近代国家の国境の概念や、現代の国際法の倫理観とは異質のものです。

#### ◇おわりに◇

西欧勢力は、キリスト教布教を名目に日本を征服する底意があり、それを阻止するために、日本は「キリシタン禁止と鎖国」を行いました。このことは、『古代史ニュース』2014 年 12 月号の拙稿「キリスト教は日本侵略の先兵だった」で書きましたが、本稿はその続編とも云えます。なお、朝鮮出兵の真因を「イベリア勢力の世界侵略に対する秀吉の怒りと対抗心」であったとする解釈は、平川新東北大学名誉教授が主張しておりまして、『戦国日本と大航海時代』(中公新書 2018 年 4 月初版)に詳述されています。

朝鮮出兵は失敗に終わりましたが、秀吉の軍事行動は、スペイン勢力に対して日本を武力で征服することの困難さを認識させました。それ故、西欧列強はその後の徳川政権の鎖国政策に対して、干渉することに躊躇せざるを得なくなりました。つまり、朝鮮出兵は西欧列強に日本の軍事力の強大さを認識させ、江戸幕府はそれを背景に日本主導による貿易と出入国の管理体制を確立することができたと云えましょう。以上